

「異議なし」と呼ぶ者あり

◇ この議事速報は、正規の会議録が発行されるまでの間、審議の参考に供するための未定稿

版で、一般への公開用ではありません

◇ 後刻速記録を調査して処置することとされた発言、理事会で協議することとされた発言等

は、原発言のまま掲載しています。

○西川委員長 質疑の申し出がありますので、順次これを許します。階猛君。

○階委員 おはようござります。民主党の階猛です。

本日は、質問の機会を、ございましてあります。おはようござります。民主党の階猛です。

ンネルが伸びております。これは途中で切れていますけれども、トンネルの真ん中あたりに粒子測定器というものがございまして、ここで電子、陽電子の衝突の様子を測定するということであります。その両端から電子、陽電子を発射させて衝突させるということで、全長五十キロにも及ぶという壮大なものです。

ので、審議の際の引用に当たっては正規の会議録と受け取されることのないようお願ひいたします。

午前九時開議

○西川委員長 これより会議を開きます。
文部科学行政の基本施策に関する件について調査を進めます。

文員長

3

り会議を開く

九十九

が御答弁されたようなんですが、この委員会では余りそういうことはなかつたようですので、ちょっと私の方から簡単に説明させていただきます。まず、お手元の資料一をごらんください。ILCとは国際リニアコライダーの略称ですけ

そこで、この施設を建設する意義ということなんですが、まず、建設の過程で必要とされる技術それから、この施設ができ上がった後に研究がなされたその成果、これによつて高い成長力を持つ新たな産業が生まれたり、施設周辺の地域に世界から多くの研究者、技術者やその家族が集まり、多文化が共生する国際色豊かなコミュニティーが形成されたりというメリットも想定されるんですが、もっと重要なことは、そうした成長力の低下や地域社会の衰退がもたらす日本の閉塞感を打破することだけではなく、宇宙創生の謎、時間と空間の謎、質量の謎といった、根源的かつ壮大

で、子供たちが興味を持つような探求を推進するプロジェクトであるということです。理科好きな子供をふやしたり、次代を担う科学技術人材の育成につながると考えております。

文科省としても、科学技術分野の人材育成につかり取り組むという観点から、この計画の検討も積極的に行うべきではないかと考えますが、大臣の御見解を伺います。

○下村国務大臣 おはようございます

高等教育局長吉田大輔君、科学技術・学術政策局長川上伸昭君、研究振興局長常盤豊君、研究開発局長田中敏君、文化庁次長有松育子君及び観光庁観光地域振興部長吉田雅彦君、以上の出席を求め説明を聴取いたしたいと存じますが、御異議ありませんか。

あり、我が国が成長を続け、新たな価値を生み出していくためには、これを担う多様な科学技術イノベーション人材の育成確保が重要であるというふうに認識しております。

特に、少子化が進み、研究の担い手の総数が減少していくことが予想されている中、基礎科学、応用科学を通じ、創造性豊かな若手研究者の育成が大切であります。

御指摘のあつた ILC 計画につきましては、こし五月に文部科学省に外部有識者による検討会議を設置し、その実施の可否判断に向けた検討を行つてあるところであります。

今後とも、こうしたプロジェクトに関する検討を含め、これは、日本単独ではなかなか規模が大き過ぎてできない部分がありますので、国際社会の動向等を踏まえながら、私自身も、アメリカに行つたときにはモニーツ・エネルギー庁長官と二回にわたつてこの ILC の取り組みについて国際社会の中でぜひ推進していこうという話し合いもしているところであります。我が国としても、科学技術イノベーション、人材育成それから研究開発に取り組んでまいりたいと思います。

○階委員 今大臣からは、文科省の検討状況それから国際的な連携について全体的なお話がありましたが、局長の方にお尋ねします。

今この点を敷衍して御説明いただきたいんですけども、資料二をごらんになつてください。

これは、「国際リニアコライダー計画に関する所見」ということで日本学術会議が昨年九月三十日に発表したものであります。二枚ほどめぐつて

いただきますと、「要旨」ということで作成の背景などを書かれておりますけれども、そもそもこのページは、文科省の研究振興局長から日本学会議会長宛てに平成二十五年五月二十七日付で ILC 計画に関する学術的見地からの検討を求める審議依頼が寄せられたということで、それを受けての回答ということであります。

中身なんですけれども、このページの下の方から書いておりますが、要は、ILC の学術的意義は認められるということは書いておりますけれども、次のページ、通し番号でいうと五ページ目ですが、真ん中よりやや下に「ILC 計画の我が国における本格実施を現時点において認めることは時期尚早」というふうに書かれております。そしてその上で、その下あたりに、日本学術会議は、「ILC 計画の実施の可否判断に向けた諸課題の検討を行うために必要な調査等の経費を政府においても措置し、二～三年をかけて、当該分野以外の有識者及び関係政府機関も含めて集中的な調査・検討を進めること、を提言する。」というくだりになつてあります。

この後段に書かれております調査検討に関する文科省の取り組みについて具体的に御説明いただけますか。

○常盤政府参考人 お答え申し上げます。

ILC 計画につきましては、今御紹介のございました日本学術会議の提言を受けまして文部科学省において外部有識者による会議を設置いたしまして、実施の可否判断に向けた諸課題の検討を進めているところでございます。

ILC 計画につきましては、今御紹介のございました日本学術会議の提言を受けまして文部科学省において外部有識者による会議を設置いたしまして、実施の可否判断に向けた諸課題の検討を進めているところでございます。

具体的には、第一回の有識者会議をこの五月に開催いたしまして、より専門的な事項について検討を実施するために、素粒子原子核物理作業部会及び技術設計報告書検証作業部会を設置させていただいたところでございます。

この二つの作業部会のうち素粒子原子核物理作業部会におきましては、巨額の投資に見合います科学的な意義に関する検討、技術設計報告書に示されているコストや人材の集積見込み等の検討をそれぞれ進めているところでございます。

今後、十一月十四日に第二回の有識者会議を開催いたしまして、この二つの作業部会における議論の概要について進捗報告をしていただく予定でございます。

引き続き、実施の可否判断に向けました諸課題の検討を進めてまいりたいと考えてございます。

○階委員 今のところ検討は順調に進んでいるというふうに理解してよろしいかどうか。それからもう一点、先ほど引用したところの前段部分で、ILC 計画の実施の可否判断に向けた諸課題の検討の実施に必要な調査等の経費を政府において措置するよう提言していますが、この提言を受けて今年度は五千万円の予算が計上されたというふうに理解しておりますが、来年度以降もこの経費は計上されるのか。

○常盤政府参考人 文部科学省における検討につきましては、ただいま申し上げましたように、有識者会議のもとで二つの部会を設置いたしまして、

それぞれほぼ月一回ぐらいのペースで検討を重ねおりまして、そこで検討状況をまたこの十一月十四日には有識者会議本体の方に御報告するということで逐次進めているという状況でござります。

また、調査に関する経費のお話でございますが、二十六年度予算におきましては、国際リニアコライダーに関する調査検討費といたしまして文部科学省で五千万円を計上いたしております。その中で具体的には、技術的、経済的波及効果、あるいは世界各国における素粒子原子核物理学分野の将来構想等について調査を進めております。

また、二十七年度につきましても、概算要求において、この検討経費をさらに増額することも含めて要求をさせていただいているところでございまして、コスト面であるとか、あるいは技術的フレイジビリティに関する調査等を進めることを検討しているところでございます。

○階委員 今の答弁で、月に一回のペースで精力的に検討はされている、それから、予算の措置についても文科省として前向きにやっているということは理解しますので、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

その上で、先ほど引用したのは、通し番号の五ページの真ん中や下のあたりですけれども、その下もちょっと見ていただき、「ILCの我が国への誘致の判断には、本回答が提示する諸課題について十分な調査・検討が行われ、建設、運転、高度化、最終処理にわたる経費の全容とその国際分担、人材や管理運営体制の問題な

ど課題事項に対し明確な見通しが得られることが必須」とありまして、先ほど来議論しております「調査・検討」と「並行して海外主要国・地域の研究機関や資源配分機関との協議を行い、国際分担等に関する見極めを行うべきである。」というのが学術会議の提言であります。

そこで文科大臣にお尋ねいたしますけれども、国際分担等に関する見極めを行うための「海外主要国・地域の研究機関や資源配分機関との協議」という部分についても文科省としてしっかり取り組んでいくべきではないかと思っておりますが、この点について御所見を伺います。

○下村国務大臣 御指摘の点については、日本学術会議の所見でも国際分担が重要と認識されており、文部科学省としても、加速器分野における国際協力は重要と認識しております。

また、ILC計画についても、先ほど申し上げましたが、私も、米国でエネルギー省の長官との間で二回にわたって意見交換も行つております。事務レベルでは、欧州合同原子核研究機関、CERN等とも意見交換を行うなど、国際的に情報共有を図っているところであります。

国際協力については、文科省に設置された有識者会議における検討項目の一つとして挙げられて

が重要な意義を持つということはこの学術会議での提言でも言われているわけであります。実際に進めていく上では、やはりさまざまな課題について調査検討を進める必要があるということで、二、三年をかけて今調査検討の段階にあるならば、今度は立地場所という話になつていくわけであります。

きょうの資料一にもお配りしていますように、私も東北の出身なですから、東北地方では、やはり、子供たちに夢や希望を与えるILCといふものをぜひ誘致したいという思いがありますが、一方で、ほかの地域でもそういう希望はあると伺っております。やはりオールジャパンで推進していくために、余り地域の誘致ということを最優先で言わない方がいいのかなと思いますけれども、きのうも私のところに地元の経済団体の方がお越しくなつて、ぜひこれはやりたいんだという熱い思いを語られました。

ぜひ大臣にもそのあたりもお酌み取りいただきながら、ILCをオールジャパンで進めていくだけくよう重ねてお願いを申し上げまして、私からの質疑とさせていただきます。

きょうはありがとうございました。

○階委員 そろそろ時間でございますのでまとめますけれども、そもそも、このILCというもの